実践報告

壬辰戦争に対する日本と韓国の中学生の歴史認識

三　橋　広　夫
日本福祉大学　子ども発達学部

The Historical Recognition of Japanese and Korean Junior High School Students about the Jinshin/Imjin War

Hiroo MITSUHASHI
Faculty of Child Development, Nihon Fukushi University

Key Words：壬辰戦争，豊臣秀吉，沙也可，歴史認識，歴史の授業，日韓交流

はじめに

本稿は，豊臣秀吉による朝鮮侵略[1]時に，日本軍から朝鮮側に投降したばかりか，日本軍と戦った「沙也可（さやか）」という人物を通してその戦争をどうとらえるかを日本，そして韓国の中学生とともに追究した授業実践の報告である．

日本では 1995 年と 1999 年の 2 回，韓国では 2003 年に 1 回授業を行った．この中で日韓の中学生は，沙也可の行動の歴史的な意味を真剣に考え，自ら歴史認識を深めていった．

中学生が自ら歴史認識を深めるには，どのような授業が必要であるか提起したい．

1.「沙也可」という人物について

これらの授業で扱った沙也可については不明の部分が多い．『慕夏堂（ぼかどう）文集』によると，1592 年 4 月に加藤清正の先鋒武将として釜山（プサン）に上陸したが，すぐに朝鮮に憧れて 3000 人の兵士とともに朝鮮側に降伏した．沙也可は火縄銃や大砲の技術を朝鮮に伝え日本軍と戦い，その功績を称えられ朝鮮国王から金忠善（キムチュンソン）の名を下賜された．その後も女真人による侵略を撃退するなどの功績によって嘉善大夫（従二品）まで昇進した，という．

だが，この『慕夏堂文集』に注目して日本で出版された『慕夏堂集』[2] は，その刊行の辞で「朝鮮儒生の曲筆舞文なり」[3] と断じ，沙也可の存在を否定した．さらに，編集者自体が「かくのごとき偽書を信じ，沙也可のごとき売国奴の同胞中にありしことを信ずるものあるは，遺憾の極なりと云うべし」[4] と沙也可を売国奴と決めつけている．ここには，朝鮮側に投降して日本軍と戦った日本人がいたという事実を見られない（あるいは見たくない）植民地主義が見てとれる．

これに対して中村栄孝は，『朝鮮王朝実録』[5] や『承政院日記』[6] などの記事から沙也可が実在の人物であることを証明した．その後，北島万次[7]が秀吉の朝鮮侵略の全体像とともに，多くの降倭（こうわ）たちがどのような境遇で降倭となり，その後どういう行動を取ったかを明らかにした．また，貫井正之[8]が沙也可だけでなく降倭全体の研究を深めた．

こうした研究の深まりを反映して，中学校歴史教科書[9]や高校日本史教科書[10]にも沙也可のことを記述した

教科書が現れた．

そうは言っても，出自もはっきりせず不明な点が多い人物であるため，授業で扱われることはまれである．また，扱われたとしても「こういう人物もいました」式にとどまる可能性が高い．子どもたちの常識を覆す事実を提示し，そこから子どもが考えていく授業こそが歴史認識を深めるとすると，この沙也可を含めた降倭は貴重な存在だといえる．

また，秀吉軍の残虐性を暴露するような授業実践では子どもの認識を揺らすことはできない[11]．子どもたちが自ら考え，問いを持ち，討論する授業こそが子どもたちの認識を変える．なぜならば，こうした討論授業で驚き，そして共感するのは，何と言っても隣の友だちが自分と意見が違うからである．そのことを発見すると「授業が楽しい」と言う．子どもの表現を借りると「あっという間に授業が終わってしまいました」となる[12]．こうした授業に「沙也可」はうってつけの教材といえる．

2．日韓中学生の歴史認識

⑴　日本での1回目の実践

この授業[13]は次のような問題意識に基づいて行った．

> (「秀吉の朝鮮征伐」や「壬辰倭乱」という認識は)対立するように見えて，実は同じ論理に貫かれている．この戦争を日本や朝鮮という国家の立場から見ていくのである．これを「国家の論理」と呼ぼう．歴史を「国家の論理」で見ていくとき，民主主義を確立していく主権者として育っていくことは難しい．したがっていかに「国家の論理」を相対化して歴史を認識するかが求められる．……(今までの実践は)子どもの認識が問題とされず，教師の教え込みだけに終始していたのではないだろうか．その点で教材「降倭将沙也可」は，日本人でありながら朝鮮側について秀吉軍と戦うという，子どもの思考範囲を超えた歴史的事実であるため，このことをどう考えるのか子どもたちは迫られる．そして，討論の中で，子どもたちが自分の歴史認識を明確にしていく教材でもある．

子どもたちは，韓国海苔を食べることから始まり，NHKの番組を視聴した[14]．その後，石高の書かれていない検地帳[15]から各地の大名が必ずしもこの戦争に積極的に参加したわけではないことを学んだ．そして，侵略の過程で朝鮮で「検地」が行われ，義兵が生まれ，さらに李舜臣（イスンシン）の活動の学習後，次の史料を提示し，沙也可の学習に移った．

> 「日本からやってきた金忠善将軍は……公が日本にいたときの姓は沙氏，名前は也可であり，金忠善という名は帰化した後にわが王朝より賜った姓である．……わが国に上陸してみるとまるで蛇と豕（のように欲深く強暴な人々）が互いに争うようななかにおいても，礼儀風俗と文化の美しさがうかがえたので，心からここもまた中国に他ならないと帰化の志を抱き，……鳥銃と火砲は当時日本軍が持っていた特殊な武器で，わが国がはじめ敗戦をくり返したのは，これらの銃砲を持たないためであった．公はそこで銃砲のつくり方を教えると……これより日本軍が持っていた特殊武器を持つようになったので，結局失地を回復したのは，実際に公の力が大きかったのである．[16]」(『慕夏堂文集』)

一人の子どもの「沙也可は日本人なんだから，いくら秀吉が憎くても，日本人としての誇りを持って朝鮮と戦わなくちゃいけない」という発言をめぐって子どもたちは意見を交換していった．

こうした論理（国家の論理[17]）は根強い．同時にこの意見はパターン化されており，ひたすら「日本人だから日本側につくべし」とするだけである．パターン化されているから根強いのかもしれない．また，秀吉に従うとしても，それは一族が殺されるのはいやだからしかたなくという意見もあった．

これに対して「朝鮮側につくべし」という意見の中には，「たとえ日本人でも秀吉のしている朝鮮侵略は，秀吉にとっては日本を大国にできるからいいけど，農民には意味がないことだから，日本人として朝鮮と戦わなくてもいい」，「私は，日本人の誇りというのは，日本人ということにしばられず，日本人だろうと何だろうと，自分の考えたとおりに，(秀吉が憎いなら憎いで）その考えを貫きとおすことが本当の誇りだと思う」，「秀吉のやっていることはいけないと思う．それは，耳を切ったりして日本人のすることではない．それは日本人の誇りを傷つけることではないか」のように，自分なりに考えて多様な意見を形成している．こうした多様な意見こそ，

「国家の論理」を相対化していくものではないだろうか．

だが，この実践には二つの弱点があった．一つは，子どもたちを「国家の論理」から沙也可に寄りそって「個人の論理」に導こうという教師の側の意図が強すぎたため，議論が深まらなかった．だから，もっと子どもたちの持っている論理を明確にしながら，なかまの意見に耳を傾け，その論理を検証させる授業が必要である．

さらに，沙也可が朝鮮に投降したことで，「国家の論理」を乗りこえた存在としてとらえてしまった．戦争後，沙也可は北方の国境警備につくが，そればかりか農民の蜂起に対しても積極的に鎮圧に乗りだす．沙也可は，決して朝鮮民衆の立場に立っていたわけではなかった．この点を欠落させ，秀吉の侵略に立ち向かったことだけを見るとき，私たちはもう一つの「国家の論理」にからめとられることになる．

こうした弱点は，私の授業論にもあった．上述のように「歴史を『国家の論理』で見ていくとき，民主主義を確立していく主権者として育っていくことは難しい」と主張しているが，ここで「主権者」とあるのはまさしく国家を構成する国民という意味であり，「国家」を背負うべきということになる．それを相対化することこそこの授業の目的であったはずなのに，である．

⑵　日本での２回目の実践[18]

子どもたちはもちろん「国家の論理」を相対化するために歴史を学ぶわけではない．しかし，討論や意見の言い合いの中で，考えが深まっていくことは中学生でも実感できる．その深まりこそが相対化の原動力となる．ただ，相対化の方向だけの意見を取りあげては元も子もない．歴史認識の揺れが保証された授業でなければ，考えの深まりもないのである．

２回目の実践では，１回目の授業の反省に基づいて，子どもたちの疑問を多く取り上げた．すると子どもたちは「日本が朝鮮で検地を行ったということは，年貢もとったのか」，「なぜ沙也可は日本軍を裏切ったのか」，「一万人の人々はなぜ豊臣秀吉を裏切ったのか」などを知りたがっていることがわかった．

討論では，「日本は非常に荒廃していて，日本軍が勝ったとしても日本に戻ればまた厳しい税を秀吉に収めて貧しい生活になる．それに，戦争にいつまた巻き込まれて殺されてしまうかもしれないので，平和で，戦争がない朝鮮側に立った．朝鮮側に立って日本軍と戦ったのは，朝鮮側から大切にされると考えたからだ」や「日本は戦争がとても多くて日本の兵士たちも本当に嫌気がさして裏切った．そして，沙也可は秀吉に滅亡させられた将軍の部下で秀吉を恨んでいたので，この機会に逃げようと計画していた．それに税金も厳しかった．秀吉が検地をしたり，刀狩りをして，農民と武士を区別した．したがって農民はすでに戦争には行かなくてもよいとされたが，秀吉が強かったのでこの戦いに引き出されても自分の意見が言えなかった」などの意見が出され，子どもたちの思考に沿って授業が進んだため，１回目の授業と比べて認識も深くなっていることがわかる．

ここで沙也可のその後の行動を問題とした．沙也可たちは朝鮮民衆の立場に立っていたわけではないからである．1594 年の宋儒真（ソンユジン）の蜂起や 1596 年の李夢鶴（イモンハク）の蜂起には降倭部隊が動員され，1624 年に漢城（ハンソン）に迫った李适（イグァル）の蜂起にも沙也可は積極的にその鎮圧に参加している[19]．

１回目の実践では「沙也可は朝鮮側につくべきか」をテーマとしたが，今回は「沙也可の行動は意味があったか」を考えさせた．子どもたちが，沙也可に寄りそいつつ，この侵略戦争をどのようにとらえるかが明確になると考えたからである．

それまで「沙也可は戦国時代の争いばかりしている日本がいやだし，まちがっているという考えをもっていた．朝鮮が平和な国と知り，自分の求める理想とぴったりだったので，朝鮮側についた．農民が反乱したときにやっつけたのは，国王に忠義を誓ったからでもあったが，もとの日本のように戦乱の国になるのを防ぐためだった．もしここで止めなければ，各地で農民が反乱をおこし，国が乱れ，国王の信頼も裏切ることになってしまう」と考えていた子どもは，友だちの意見を聞きながら，「沙也可は日本のことをどう思っていたのだろうか．沙也可にとって『日本を裏切ってまでつくほど朝鮮はよい国』だったのか．日本に残された家族は日本を裏切ったとして殺されてしまったと思う」と書いている．朝鮮は矛盾のない理想の国ではなく，日本と同じように封建支配層によるきびしい政治が行われていたことに気づいていったのである．

別の子どもは「国王に『金忠善』というすばらしい名前や，高い位までもらったので，なかなか国王の命令に逆らえなかった．だから，自分ではこうしたいと思っても，国王の命令があるので，悩んだと思う．一揆をおこした農民たちをおさえようとしたときは，とても悩んだ

ことだろう」と沙也可の行動に共感しながらも，国王，農民の関係からその意味を考えた．

ここで言えるのは，沙也可のその後の行動を考えると，当時の朝鮮社会の矛盾にぶつかることである．その意味で「沙也可の行動は意味があったか」というテーマは子どもたちにとって考える価値のあるものであったといえる．

それでも「国家の論理」は根強い．「沙也可は国王にとても忠誠心のある人だ．『金忠善』という位の高い名前をもえらえたのもきっと国王に気に入られたからだと思う．その名前をもらったかわりに，鉄砲の技術も教えたのだろう．国王としては年貢を減らしたくないのだから，沙也可も命令に従わなくてはいけない」と，もう一つの「国家の論理」＝朝鮮王朝の立場から沙也可の行動の意味を考えている．

⑶　3回目の実践[20]

韓国での授業である．韓国の中学生と初めての授業をするため，生活体験から授業を始めた．韓国の姓と当時の人物を想起させ，その後鳥銃（火縄銃）のレプリカを見せたりして沙也可に接近していった．その次に，1回目・2回目の授業で出された日本の中学生の意見を整理して「沙也可の行動をどう思うか」を問うた．このねらいは二つあった．一つは，日本の中学生への意見を書くということで，韓国の中学生に自分の意見を披瀝することに自信を持たせられ，二つには日韓の中学生の疑似討論という形が取れることであった．

日本の中学生の「沙也可は日本人だから，いくら豊臣秀吉を嫌いだといっても必ず日本側に立たなければならない．いくら嫌いだといっても日本人なんだから日本人としての誇りを持ってこの戦争に勝たなければならないと思う」への反対意見から討論が始まった．

「沙也可は日本人だが，私たちの礼儀風俗と文化を朝鮮人より愛し，中国文化と変わらないと考えた．金忠善が，朝鮮に来て日本軍と戦ったことがまちがったことだとは思えない．……金忠善が朝鮮に来て日本軍と戦ったのは，力の強い秀吉に対する反抗だったと見られるからだ．」

沙也可が朝鮮の文化を愛したことと秀吉への反抗を「慕夏堂文集」から読み取ってその行動を肯定する意見だが，すぐに反論が行われた．

「どんなに秀吉が嫌いでも，日本は（沙也可にとって）自分の祖国です．自分の祖国がどんなに嫌いでも，その国の国民ならば当然自分の国のために戦って戦争に勝たなければならないと思います．その意味で私は沙也可が，秀吉が嫌いだから韓国に帰化して（朝鮮側に立って）戦争を助けたことを賢明だったとは思えません．また，沙也可はきっと自分が豊かになるために朝鮮側についたのでしょう．沙也可は韓国が好きだったので帰化をしたというのは，私の考えでは，真実ではないと思います．」

沙也可は日本人なのだから賢明な選択ではなかったとし，「礼儀風俗と文化の美しさがうかがえたので，心からここもまた中国に他ならないと帰化の志を抱き」という『慕夏堂文集』の記述そのものに疑問をもった．これは『文集』の儒教的なイデオロギーで飾られた記述に対する批判である．そうした批判の上に，彼女の「国家の論理」からすれば当然沙也可の行動は否定されるべきものだった．「祖国」を裏切ることはあってはならなかった．たとえそれがまちがった侵略戦争を引きおこした国であっても，である．

子どもたちは，日本の中学生が生活実感からつくり上げた主張を通して考え，自分の意見を形成した．つまり日韓の中学生は『文集』に沿って答えを見つけ，なぞるのではなく，『文集』も一つの史料として批判することができたのである．

そのため，韓国の中学生がなぜ「国家の論理」を披瀝したのか理解できる．南北分断という現実を見れば，統一を課題とする韓国社会に生きている彼女たちがナショナリズムを強く意識するのは当然と言える．

そこで，実際にはできなかったが，「沙也可のその後」を見つめる授業を構想してみよう．沙也可は確かに朝鮮に「帰化」した．しかし，彼は朝鮮の民衆の立場に立ったわけではない．あくまでも朝鮮王朝に「帰化」したのである．だから日本軍が漢城に迫ったとき民を捨てて逃亡した宣祖（ソンジョ）から金忠善という名前を下賜されたとも言える．この金忠善という名前にどういう意味があるかを考えてもよいだろう．「忠義の深い，善き家臣」という意味なのだろうか．

そして，授業のなかでは，李夢鶴の蜂起などを鎮圧する金忠善について子どもたちにその行動の意味を考えさせたい．その理由は，日本の中学生にとっては，沙也可の行動そのものがこの侵略戦争の矛盾の現れだったが，韓国の中学生には，その後の沙也可の行動を通して侵略戦争中・後の民衆の蜂起に目を向け，朝鮮王朝の封建的

な矛盾に注目させたいからである．

3．授業のあり方

こうした授業は，子どもたちが自由に発言できるという自信をもっていなければ成立しない．特に韓国の子どもたちはとても楽しそうだった．笑いが絶えなかった．つまり，この学級では子どもたちの間の信頼関係ができていたことがわかる．これは大いに認められるべきである．私たちは学習集団あるいは学級集団が高まらなければ，一人ひとりの子どもの認識も高まらないことを知っている．友人や学級という関係を築こうとする子どもたちがいるからこそこうした授業は可能なのである．子どもたちをばらばらにする試みのなかでは子どもたちの歴史認識は深まらない．

授業後の感想の中に「金忠善（沙也可）のことが詳しくわかった．壬辰倭乱のとき，わが国が好きだったので朝鮮を助け，暮らしたということだ．だが金忠善を重く扱いすぎると，わが国を侵した日本の意図（の理解）を弱めると思う」という一文があった．このような意見を読むとうれしくなる．授業への批判だからである．先生は沙也可のことを肯定的にとらえさせようとしているが，私はそうは思わない．秀吉の侵略は許せない，という気持ちの表れであろう．こうした意見を授業中に発言するようになると，授業がもっと活発になり，子どもたちはその歴史認識をもっと深めることができるのである．

さらに歴史認識は現実認識とも深い関係にある．だからこそ，自分たちが強くナショナリズムを意識していること自体を子どもたちがどう考えるかという授業が構想されるべきである．ナショナリズムにどっぷりつかっている韓国の現実と民主主義を追求してきた歴史の中で，子どもたちがこの二つにどう立ち向かっていくか．時には背離し，時には交叉するこのナショナリズムと民主主義という二つの流れを子どもたちがどのように認識するか，という視点での授業が構想されるべきである．

日本の歴史教育においても同様に「国家の論理」を相対化する授業を追求することが求められている．その際「歴史像がナショナリズムの配分になってはならない．そのためにはあらゆる『複数性』を意識することが肝要」[21] だとする指摘は重要であり，それを歴史教育の側から言えば，子どもたちの歴史認識の複数性が保障される授業を求めることになる．

本報告は，2011 年 9 月 23～24 日に，台北市・台湾中央研究院人文社会科学研究中心で行われた台湾中央研究院人文社会科学研究中心海洋史研究専題中心・韓国東北アジア歴史財団共催の「戦与東亜世界学術研討会」で発表した原稿に加筆・修正を加えたものである．

注

(1) 豊臣秀吉によって引き起こされたこの侵略戦争の呼称については，日本では，古くは「唐入り」などと称されていたが，近代以降「文禄・慶長の役」，「朝鮮征伐」，「朝鮮出兵」，最近では「豊臣秀吉の朝鮮侵略」と呼ばれてきた．韓国では「壬辰倭乱」，中国では「抗倭援朝戦争」と呼ばれている．こうした自国史を批判しつつ，「この戦争を国家史の枠組みを越え，国際的視野から考察するとともに，民族主義的偏見から解放」するとして「壬辰戦争」という呼称が提起されている（鄭杜熙ほか編著『壬辰戦争―16 世紀日・朝・中の国際戦争』明石書店，2009）．

(2) 朝鮮史研究会『慕夏堂集』，1915．

(3) 立花小一郎（朝鮮総督府警務総長，陸軍中将）の発刊の辞（同前，p. 1）．

(4) 河合弘民（東洋協会専門学校京城分校長）は「偽書慕夏堂文集」という表題を付けて論じている（同前，pp. 41～60）．

(5) 『朝鮮王朝実録』宣祖 30 年 11 月己酉条には「降倭同知要叱其・僉知沙也加〈可〉・降倭念之，斬各一級，倭旗紅白黒白大小旗三面・槍一柄・剣十五柄・鳥銃二柄・牛四首・馬一匹・我国被虜人百余名奪来」の記述がある（中村栄孝『日鮮関係史の研究　中』吉川弘文館，1969，p. 434）．

(6) 仁祖 6 年 4 月 23 日に「其時，降倭領将金忠幸称名者，為人不特胆勇超人，性亦恭護，故适変時，逃命降倭追捕一事」の記事がある（中村，同前，p. 431）．ここでは「沙也可」ではなく，「金忠善」となっていることに注意する必要がある．

(7) 『豊臣秀吉の朝鮮侵略（新装版）』吉川弘文館，1995．『壬辰倭乱と秀吉・島津・李舜臣』校倉書房，2002．

(8) 『豊臣政権の海外侵略と朝鮮義兵研究』青木書店，1996．なお，貫井は，沙也可の投降を早くて 1594 年以降と推定し，国王からの賜姓も 1597 年よりも後年のことと主張する（同前，p. 245）．

(9) 大阪書籍 2002 年版はコラムで「朝鮮側についた『沙也可』／九州の大名の武将「沙也可」は，朝鮮に上陸後に出兵への疑問をもち，数千の兵を引き連れて投降しました．そして，火縄銃の装備などを持たない朝鮮軍にその製造法や射撃術を伝え，自らも秀吉軍と戦って，朝鮮に住みついたといわれています．このように，戦いが長引くにつれ，朝鮮との戦いに疑問を持つ人やきびしい寒さや食料不足から，朝鮮側につく人が多くなりました」と記述している．

(10) 実教出版 1991 年版は「秀吉の朝鮮侵略は，多くの人々をその渦中にまきこんだ．捕虜として日本に連行された人もあれば，さらにヨーロッパへ転売された人もあった．また，朝鮮人でありながら日本側についた人もいた．彼等は順倭と呼ばれている．順倭の中には，心ならずも日本側の手先

になった者もいれば，もともと朝鮮国家にうらみをいだき，日本軍の侵略をきっかけに積極的に順倭になった者もいた．そして，日本軍のなかにも朝鮮側に投降した者がいた．彼等は降倭とよばれている．彼等のなかには長陣による兵糧不足と厭戦気分から降倭になった者もいれば，はじめから秀吉の海外派兵に疑問をいだき，積極的に朝鮮側に投降した者もいた」と記述している．

⑾ 目良誠二郎は自身の近現代史での暴露型授業を「日本の侵略をおそらくあたかも中国人や朝鮮人のような顔をして『暴露＝告発』していた姿勢」と「加害の事実を暴露的に教えるのに急で，子どもたちに加害の事実を直視する勇気とアジア諸国民との和解・共生を願う主体的な意欲と展望を育てるという，授業本来の目的を見失っていた」と反省している（「加害の歴史の授業の反省から―歴史の転換期と近現代史教育の課題―」(『教育』1997年5月号)，「開かれたナショナル・アイデンティティの形成と社会科・歴史教育―加害の授業をどう反省するか―」(『歴史学研究』1998年10月増刊号)．これは大事な指摘であるが，目良と筆者の授業観には違いがある．

⑿ ただし，どんな授業でもこうなるわけではない．学習指導要領の枠組みのなかで編纂された教科書記述になんの疑問も持たずに，その記述の論理を注入する授業ではこうした子どもの意見が発せられることはない．そもそもそうした授業構想には，子どもの意見を聞こうなどということは想定されないだろう．また，「正史」についての問いのない授業は，子どもたちに歴史事項の暗記を迫り，そのことによって子どもたちは，歴史は自分の人生とは無関係のものだという認識を獲得し，したがって現実に対する問いも持ちえないことになり，体制順応型の人間類型をつくり出す効果を持つことを注視すべきである．

⒀ この授業実践を韓国の教師たちとのシンポジウムで発表した．拙稿「降倭将沙也可と子どもの歴史認識―秀吉の朝鮮侵略をどう教えたか」(日韓教育実践研究会編『第3回日韓歴史教師交流会』，1995) を参照．

⒁ NHK発見「朝鮮出兵400年―秀吉に反逆した日本武将」(1992年10月30日放送)．

⒂ 「長曽我部検地帳」(NHK取材班『歴史誕生7』)．秀吉は石高に応じて各大名に動員数を割り振った．したがって，こうした検地帳は石高が少なく見積もられ，動員数も少なくて済むことを表している．

⒃ 原文は「公在日本姓沙名也可，金忠善則向化後　本朝所賜姓錫名者也……下陸雖蛇豕，搶攘之中見礼文物之盛欣々焉曰是亦夏也……鳥銃火砲則彼長技，我国之最初摧敗坐於此也，公乃教以銃砲打造之法，観於当時諸陣之往復書可徴也，自是而彼之長技我亦有」である（「慕夏堂文集序」，『慕夏堂集』，p. 1)．

⒄ 吉田悟郎は，これを〈日本・日本人・日本史イデオロギー〉と呼んでいる．「こういう自己認識，こういう共通的な意識に支えられ，そういう自己認識や自己意識を共にすると思っている共同体みたいなもの」は「国民国家的な枠や帝国意識の日本版にあたるものの分身である」と喝破している（吉田悟郎『世界史学講義（下)』御茶の水書房，1995，pp. 280～283)．

⒅ 詳しくは拙稿「降倭将沙也可を通して学ぶ秀吉の朝鮮侵略」，『歴史地理教育』1999年7月号を参照．

⒆ これらの蜂起の性格や降倭部隊の参加状況については貫井，前掲書が詳しい．ちなみに，1596年7月，李夢鶴ら700名が忠清道鴻山（チュンチョンド ホンサン）で蜂起し，県監と林川郡の郡守をとらえた．戦争によって民衆の生活がめちゃくちゃになったにもかかわらず，戻ってきた郡守たちは以前のような税をとろうとしたからである．指導者李夢鶴は庶子，凌雲（ヌンウン）は僧侶，彭従（ポンジョン）は奴婢だった．李夢鶴は義兵将の一人でもある（『乱中雑録』3丙申7月，『朝鮮王朝実録』宣祖29年7月戊午)．

⒇ 詳しくは拙稿「韓国の中学生と学ぶ『秀吉の朝鮮侵略』の授業―降倭将沙也可の行動を通して―」，『歴史地理教育』2005年11月号を参照．

㉑ 成田龍一「『東アジア史』の可能性―日本・中国・韓国＝共同編集『未来を開く歴史』(2005年）をめぐって」，小森陽一ほか編著『東アジア歴史認識論争のメタヒストリー―「韓日，連帯21」の試み』青弓社，2008，pp. 127～128．